

週刊センターニュース No.40



第40号(2004年12月14日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

本学イーラーニング研究会と第51回共同学習会との合同研究会(第5回)のご案内

日時: 12月17日(金) 16:20~17:50

場所: 総合メディア基盤センター2階プレゼンテーション室

タイトル: 「学生の自立性を高める教育学習支援システム・TIESの取り組み」

講演者: 堀真寿美・細谷征爾(帝塚山大学 TIES 教材開発室)

内容: 帝塚山大学では学生が自主的に学ぶ姿勢を育て、社会に貢献する人材を育成するために1996年より学生のための教育支援プロジェクト TIES(タイズ)に取り組み始めた。TIESは現在、本学を含め13大学60人以上の教員で共同利用されており教材数も2000以上となっている。TIESの特徴は大学の垣根を越えた教材・講義の共同配信・利用、そして自習を促す予習・復習機能、教員と学生との双方向のコミュニケーションを図ることができる授業の自己診断テスト・アンケート・掲示板等である。今回の事例紹介ではTIESを利用した実際の授業を紹介するとともに、本学でのTIESを運用するに当たっての教材作成支援、そして授業での運用支援の体制に関して報告する。

共同学習会のご案内

第52回 日時: 12月22日(水) 16:20~17:50

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階会議室

テーマ: 地域科学研究会・高等教育情報センター主催セミナー

「教員人事・評価制度の開発と活力」参加報告

担当: 堀井祐介(金沢大学大学教育開発・支援センター)

シンポジウム「大学教育の課題と展望」(岡山県大学長懇談会主催)参加報告

11月1日(月)に岡山大学で開催されたシンポジウム「大学教育の課題と展望」に参加した。このシンポジウムは岡山県の教育の日である11月1日に岡山県大学長懇談会主催で行われたものであり、主に岡山県内の大学関係者向けのものであった。プログラムは、有本章氏(広島大学高等教育研究開発センター長)の基調講演と2つのテーマによる個別シンポジウムから構成されていた。

有本氏の講演は「現代に求められている大学教育とは - 学士課程教育の視点から - 」というタイトルで行われた。歴史的な社会の変化に伴う大学の変化、歴史的な教養教育の変遷、新しい時代の教養教育としてのコアカリキュラムやコンセントレーションコース、教養教育の再構築とその評価、大学教育の質的保証、第三者評価、教員の資質改善への取り組み、学習者による授業評価、新しい教養教育モデルの構築など非常に多くのトピックについて説明がなされた。特に、「知識社会への移行に伴い、大学が外へ出て、社会と関わりをより深めること」、「やり直しのきく教育システム構築(学士課程全体を教養教育の場とする、専門を学んでから教養を)」、「学習者の立場に立った教育を」という発言が印象的であった。

シンポジウム第1部のテーマは「教養教育と専門教育の関係」であり、倉敷芸術科学大学からは、アメリカでのサービスラーニング(社会の要請に対応した社会貢献活動に学生が実際に参加すること

を通じて、体験的に学習するとともに、社会に対する責任感等を養う教育方法)、イギリスでのGAPイヤー制度(大学入学資格を得た学生が入学を一年先送りし、海外を含む外の社会に出て人間形成上の知見や経験を補う制度)倉敷芸術科学大学でのGAP制度について、ノートルダム清心女子大学からは、求心的メニュー(専門の基礎とも成りうる科目によるメニュー)と遠心的メニュー(専門人としても望まれる教養と成りうる科目によるメニュー)について、中国学園大学からは、専門基礎能力としての教養の問題について報告がなされた。報告の後、全体での討論が行われたが、そこでは、「理解度の異なる学生を同じクラスに入れて、同じ単位を出してもいいのか」、「教員の意識改革(教員の視点中心から学生の視点中心へ)が必要」、「教養教育の実施組織の弱体化が問題であり、責任ある組織を作って、そこが教養と専門の関係をしっかりと構築すべきである」といった意見が出された。確かに、教養科目と専門科目の関係は各大学でそれぞれ独自の取り組みがなされており、出来るだけ学習機会を保障するという点からも非常に複雑な構成になっている。そのため、学生側だけでなく、大学側も全体像を把握するのが困難な場合がある。しかし、大学としては教養と専門の関係を学生に明確に示す義務があると考えられる。そのため、個々の授業が、卒業までの学習課程でどのような位置づけになっているのかが、言葉だけではなく、目で見てわかるようなカリキュラムマップのようなものが必要ではないかと思った。

シンポジウム第2部では「学生による授業評価」をテーマとして、岡山県立大学、岡山理科大学、岡山大学の3校それぞれから教員と学生1名ずつが参加し、各大学での「学生による授業評価」について、教員はその実施体制、質問項目などについて、学生はそれに対する感想を報告した。始めに、教員からの報告について簡単に述べさせていただく。岡山県立大学からは、「15あるアンケート項目の相関関係を統計分析した結果、5項目へ減らせる可能性がある」という報告があった。岡山理科大学では、「今年度から科目名、教員の実名入りで全学にアンケート集計結果が公表されている」、「アンケート結果を分析した結果、出席率と満足度の相関関係はない。また、単位修得率と満足度との相関関係もほとんど無い」ということが報告された。岡山大学からは、「学生による授業評価」は全国の大学で一旦活発に実施されているが、まだまだ試行錯誤段階である」、「学生の声を反映させて質問項目を9項目に減らした」、「学生参加型FDとして学生・教職員教育改善委員会が機能している」などの報告があった。また、岡山大学、岡山理科大学では仕組みの違いこそあれ、自由記述欄については執行部(学部長、学科長など)が見ることが出来るようになっていたとのことであった。次に、学生からの声であるが、3大学の学生とも基本的には同じような感想を述べていた。それをまとめると、「学生には、授業評価アンケートにきちんと答える力はあるが、アンケート結果が自分たちに反映されないのもじめに答えていない学生もいる。フィードバックの仕組みをしっかりと考えて欲しい。」というものであった。これは非常に率直な意見であると思われる。学生たちのこういった感想に対して教員から、「アンケートが有効かどうかのアンケートが必要」といったコメントも聞かれた。このように、まだまだ試行錯誤段階であるが、「学生による授業評価」が、今後の大学教育にとって必要不可欠であることは明らかである。そのため、教員からの一方的な声で「学生による授業評価」が、いい加減なものとして葬り去られることがないよう、情報公開、学生へのフィードバックをしっかりと行い、定着させていくことが重要である。

今回、このようなシンポジウムに参加し、地域間大学連携の重要性を再認識した。異なる大学間、特に同じ地域に属する大学間で教育に関して情報共有しておくことは、とかく閉鎖がちと言われる大学にとっては、非常に有益であると思われる。金沢大学でも、すでに、いしかわシティカレッジや北陸地区6大学連合などで地域間大学連携を進めているが、今後、それら連携をさらに深め、大学教育についての情報交換を進める仕組みを構築することは、それぞれの大学にとって大きなメリットになるのではないだろうか。(文責 堀井)

センター教員活動記録

2004.12.13 研究会「新・学部教育コンセプトの開発と実際」に参加 (主催:地域科学研究会、会場:東宝ビル、東京)(西山 公費出張)